

# 「音楽ベーシック I」におけるリモート授業考察

— 指導の工夫と課題 —

永 井 祐 子

## 1 はじめに

この度、想像もしていなかったパンデミックという事態によりリモート授業を行うことになり、当初は、アプリの性質上、受講者全員に向けて問かけをしてもマイクが声を拾えるのは一人だけで全員の反応が一度にわからないことや音声や映像が遅れること、また演奏の速度が急に速くなる、固まるなどのトラブルによりスムーズに進行できないことに戸惑うことが多かった。手探り状態で始まったことであったが、2年半に渡る長期の間には、例えば出来るだけ「はい」「いいえ」、あるいは挙手で返事出来るように問かける、トラブルにより課題を指導出来なかった際は授業後に動画添削するなど少しずつリモートならではの方法に慣れた。指導内容に関しては、スマートフォンやパソコンのマイクを通す演奏音には良質のものは望めないため、音色の細かい違いなど聴覚で感じ取る判断は、その空気感も含め対面授業でリアルに受け取るものには太刀打ちできないと痛感しつつ、その中で対面時により近い成果が上げられるよう、工夫を凝らしていった。ここでは通常指導の柱としている3つのポイントを挙げ、補足強化したこと、工夫したことなどを述べていく。

## 2 授業で目指している指導の3つのポイント

- ①楽譜を自力で正確に読めるようにする。  
(音、リズム、運指)。
- ②詩の内容を理解し、詩に沿う演奏を目指す。
- ③曲に合った良いテンポ、良い音で表現豊かに演奏する。

## 3 ①②③のポイント各々の内容と、リモート授業において補足強化、工夫した点

①は、主として初心者向けの内容であるが、いわゆる表面的な読譜は視覚から習得する部分が多いので対面授業とあまり差異なく指導出来る事項である。音価は資料を用いて説明、リズムはリズム打ちの課題を実施して理解させ、拍の数え方を楽譜に書かせ課題曲を「1ト2ト…」と声に出して数えながら弾かせた。この拍を数えながらの演習は対面だと躊躇してやりたがらない学生がいるが、リモートであれば人目を気にせず発声出来るようである。音価と拍の数え方の理解が進めば、いわゆる耳コピーではなく自力で読譜が出来るようになる。運指は、曲をよどみなく演奏する上でとても重要な要素である。常日頃から、適切でなおかつ常に同じ運指で練習することの重要性を説き指導しているが、リモートにおいてもどのような運指で弾いているか目視し、手本を示すため、学生には手元が画面によく映るようにカメラを配置させ、指導する側は手元専用と顔専用の2画面で対応した。



リモート授業時のピアノと機器設置写真

②は、弾き歌いする上で最も大切なことである。歌詞についての考察、例えば「たなばたさま」に出てくる『のきば』や、「かたつむり」に出てくる『でんでん』など、現代あまり使用されない語彙の理解、詩の表す風景から伴奏部分をどう表現すればいいかのイメージを得ることが出来る。また自ずとブレスの位置を知ることが出来る。このことは対面授業同様にリモート授業においても可能である。ここでピアノパートの主旋律を詩に沿うよう、歌唱と同様にレガートで弾く指導がとて重要であるが、リモートでは、80%以上の学生が電子楽器を使用しており(グラフ1参照)、楽器によっての個体差はあるが、鍵盤の重みを感じながら打鍵し弦を振動させた響きによるレガートを作ることが難しく、また指導する側の手本演奏が果たしてどの程度のレガートに聴こえているか甚だ疑問であった。通常の対面時であっても初心者にとっては次の音を打鍵するまでに極力音を持続するレガートのテクニックを習得させることは困難を要することで、ピアノの経験がある者でも、自身で気づきレガートで演奏する学生は少ない。先に述べた歌詞の考察に加えて、詩の情景を思い浮かべられるよう、メロディーをつけず音読、時には暗唱させて、歌詞の内容の理解を深め歌唱によって楽器の短所を補えるよう心掛けた。

③は、ある程度ピアノを弾いたことのある経験者向けの内容になる。この部分における指導がリモートにおいて最も困難なところであり、正直なところ限界を痛感するところである。②とは逆にピアノパートの書法から表現方法を考察するものである。ここで「お花がわらった」という比較的経験者が取り組む曲を例にあげる。

この曲は歌詞が『お花がわらった(繰り返し)、みんなわらった、いちどにわらった』というごくシンプルなものであるが、オリジナル楽譜のピアノパートにおいては優しい春風にそっと揺らぐ花畑の花々の様子が見事に表現されている。冒頭の2小節目の主旋律の中から出てくる内声のメゾスタッカートはメロディーの繋がり

を持たせながら軽やかに揺らぐように演奏するのが理想の表現であるが、リモートでの手本の演奏では伝わりにくい。(譜例1参照)学生の演奏を聴くと、程よいメゾスタッカートで演奏している者は居らずほとんどの学生が弾むようないわゆる普通のスタッカートで演奏している。次に強弱記号を見ると、ppからfまで幅広いデュナーミクが求められている。(譜例2参照)また、『お花がわらった』という歌詞を4度繰り返すが、一つずつ違う花を見るかの如く違った表情で弾くのが理想である。その繊細な表現を機器を通した演奏で伝え合うことはとても困難なことであった。

そこで、手本演奏ではデュナーミクをかなりオーバーにつけてみた。また、メゾスタッカートについては、悪い例として普通の短いスタッカートとレガートで弾いてみせた上で程よいものを弾いてみた。また左右のバランスにおいても同様に悪い例と程良い例を弾いて示した。

④ お花がわらった

譜例1 お花がわらった冒頭部分

譜例2 お花がわらった後半部分

## 4 成果と課題

### ①成果

後期に对面授業に戻り、前期にリモート授業担当した学生のうち初心者だった学生は、前期のスタート時にはへ音記号の音読みや拍数を正しく数えることに時間がかかっていたが、後期にはかなり短時間で譜読みを終えられるようになっており順調に上達していた。

運指の定着は初心者ほど意識が高く、全体的には個々のばらつきはあるものの、楽譜通りに弾くのが一番弾きやすいという意識は皆にあると感じた。この点においては対面時と変わらぬ成果があった。

### ②課題

対面に移行した当初、生の演奏を聴くと、ほとんどの学生の演奏において、pやfの強弱の表情が薄く、マイクを通して聴こえていた音量・声量よりも小さかった。

レガートで弾くことに関しても残念ながら習得している者は少なかったが、対面時にアコー

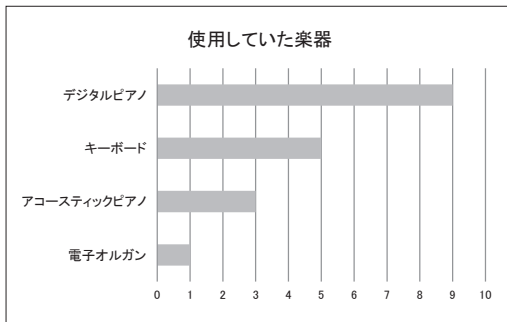
スティックピアノで鍵盤の重みを感じながら弾いたり手本演奏を見聞きすることによって改善していった。これらのことは当初の懸念通りの結果であり、課題として残るところである。カメラ・マイクの位置工夫の余地はあるが、各々の楽器や機器の性能、住宅事情にも関わることであり、改善には限界を感じる。

### ③アンケート結果を受けての課題

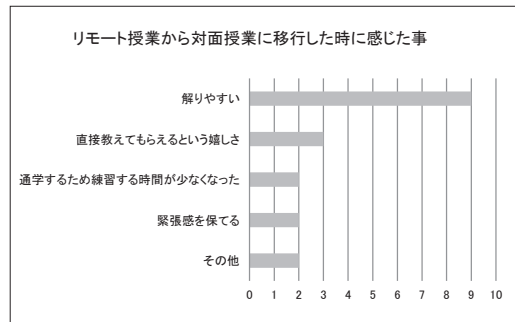
授業最終日に担当した学生にアンケートを実施した。結果は以下の通りである。

ほとんどの学生がリモート授業から対面授業に移行した時に感じたこととして、対面の方が解りやすい、直接教えてもらえて嬉しいと回答している。(グラフ2参照) 運指は小さなスマートフォンの画面越しでも違いが見て取れるが、例えば細かな手首の動きや身体や腕の使い方などを見たり直感的に感じたりすることは難しいであろう。

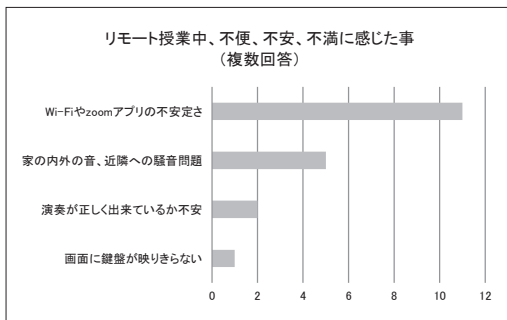
その他、考えられる原因として、映像と音声の遅れのもどかしさから会話のやり取りが無意



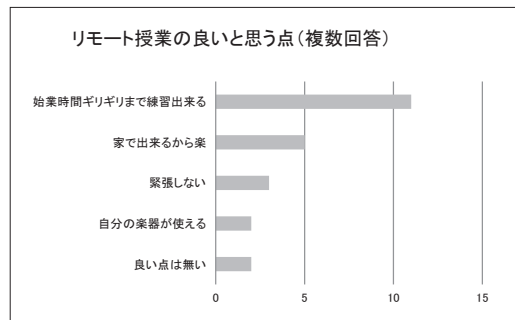
グラフ1



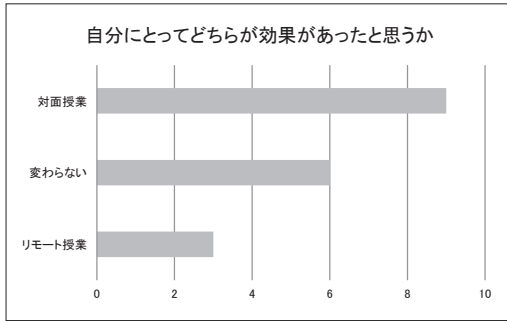
グラフ2



グラフ3



グラフ4



グラフ5

識のうちには指導する側の一方通行になっていなかったかということが考えられ反省するところでもある。

リモートでの不便さについてはWi-FiとZoomアプリの不安定な面をあげた学生が多かった。また、家の内外の生活音が気になって受講を中断したり（ペットの鳴き声がうるさかったり部屋へ入ってくる、訪問者の対応、電車の音など）、近隣への音の漏れを気にして電子ピアノのボリュームを下げたり歌唱を小さな声で行うなど集中しにくい面をあげており、実際、授業中に少なからず起きたことである。（グラフ3参照）

その一方でリモート授業の良さについては、授業が始まるギリギリまで練習出来る、家で受講出来るから楽、自分の弾きなれた楽器なので弾きやすいなどのリモートの利便性をあげた者が多かった。

また、一人で受講するので気楽で緊張しなかった、と人と関わりを持たなくて済む快適さをあげている者がおり、今後同じようなケース

で授業形態が移行することがある場合には配慮が必要かもしれない。（グラフ4参照）

対面時期とリモート時期の効果を比較した場合にリモート授業の方が効果があったと答えた学生は、グラフ2、4の質問において、（遠距離）通学により練習時間が取れなくなった、あるいは自宅であればギリギリまで練習出来ると答えている。（グラフ5参照）

## 5 おわりに

音楽が聴覚に訴える芸術である以上、リモートで一つの媒体を通すことによって全てのことを伝達し合うことは不可能に等しい。音の伝達だけでなく、お互いの間に存在する空気感や呼吸を共有し感じ合うことによって音楽が出来上がり、それこそが感動や喜びを呼ぶものなのだ。学生にはより多くそのことを体験させ、将来幼児に伝えてほしい。

しかしひと昔前であればこのような状況の中で相互にやり取りをしながらの授業は開講出来なかった。とても便利なツールとして、併用、共存するに越したことはない。今後、今回のようなリモート授業を実施しなければならない状況が無いことを願うばかりだが、パンデミックだけでなく災害による登校不可能な事態や不登校傾向の学生に対する指導のツールとして、対面と極力差異のない効果が上げられるように探究し続けていきたい。

## 参考資料

チャイルド本社「こどものうた200」